

Xではあえて反論せず 忽那さんが振り返るコロナ情報発信

2/13 毎日新聞



国内で初めて新型コロナウイルスの感染者が確認されたのは2020年1月15日。未知の感染症に誰もが不安を抱える中、ネット交流サービス（SNS）や動画投稿サイト、ブログなどで、多くの医療従事者が新型コロナに関する情報を発信し続けた。その中で最も注目された感染症専門医は、大阪大大学院の忽那賢志（くつな・さとし）教授（45）だろう。しかし、エビデンス（科学的根拠）に基づく情報提供に、多くの人から感謝される一方で、「人殺し」「犯罪者」などといった誹謗（ひぼう）中傷を受け続け、カミソリ入りの郵便物が送りつけられるなど、日常生活にも被害が及んだ。当時を振り返り、忽那さんは何を思うのか——。正しい医療情報を見極めるコツも聞いた。【聞き手・西田佐保子】

感染症の常識が覆った新型コロナ

——忽那さんが注目されたきっかけの一つが、ヤフーの運営する記事配信サービス「Yahoo!ニュース 個人」（現 Yahoo! ニュース エキスパート）です。

最初の記事は「手足口病」（19年9月15日）についてでしたが、20年1月以降、怒とうのコロナ情報発信が始まり、多い時は月15本、トータルで300本以上の記事を執筆されました。どのくらいの時間をかけて記事を仕上げていましたか？

◆ヤフーさんからお話をいただいて、感染症に関する一般的なことをいろいろ知ってもらおうと思って書き始めたのが、たまたま新型コロナの流行が始まる直前でした。

情報をしっかり調べて、吟味した上で文章に残していくので、だいたい1本執筆するのに3時間程度かかっていましたね。

——新型コロナをめぐる状況は日々変化し、ワクチンの効果や変異株の登場など常に「最新情報」が求められました。未知の感染症であるが故に、定説もあっけなく覆されます。

また、医学雑誌には査読（専門家が目を通して雑誌掲載の可否を判断する）後の研究論文が載りますが、タイムラグがあるので、新型コロナについては、ウェブサイトに掲載される査読前の「プレプリント」段階の論文も注目されました。



感染予防のため手洗いをする子どもたち＝大阪市浪速区で2020年7月20日、山田尚弘撮影

◆そうですね。新型コロナでは、今までの感染症の概念にはない特徴が明らかになっていきました。発症前から感染性がある感染症などあるはずがないと思っていましたが、その常識も覆りました。

それに合わせて情報のアップデートが必要であるというのは、発信をする上でなかなか難しいことではありましたね。マスクやワクチンの予防効果に関しても、新たな研究が出てきて、その評価も変化していきました。

おっしゃる通り、査読前でも特に重要な論文は確認します。膨大な量の論文からピックアップする作業も大変でしたね。プレプリントなので、内容が本当に正しいのかどうか、批判的義務も含めて読み込まなくてはいけませんでした。

——治療方法が確立していなかった時期に注目されたのが、抗インフルエンザウイルス剤の「アビガン」や抗寄生虫薬の「イベルメクチン」です。科学的根拠が十分ではない状況でメディアが取り上げた際、医療者から批判の声が上がりました。

◆最初の頃は、「アビガンを飲んで芸能人が回復した」という見出しのニュース記事で、効果が証明されていないにもかかわらず報道されるケースもありましたね。

たとえ新型コロナに感染した人がアビガンを飲んで、その後よくなったからといって、必ずしもアビガンが効いたとは言えません。服用しなかった人も回復していますからね。

私は、アビガンやイベルメクチンについて、「今のエビデンスでは、効果があるとは言えないので、まだ情報を待つ必要があります」と、繰り返し述べてきました。それに対して、「効くかもしれない薬があるのに使わないとはどういうことか。患者を見捨てる気か」と

非難されたりもしました。

「抗ウイルス薬の効果がある」とはどのようなことなのかを、正しく知ってもらいたいですね。やはり、科学的なリテラシーの成熟が、メディアだけでなく日本全体で必要なかもしれません。

絶えぬ誹謗中傷に訴訟費用 600 万円

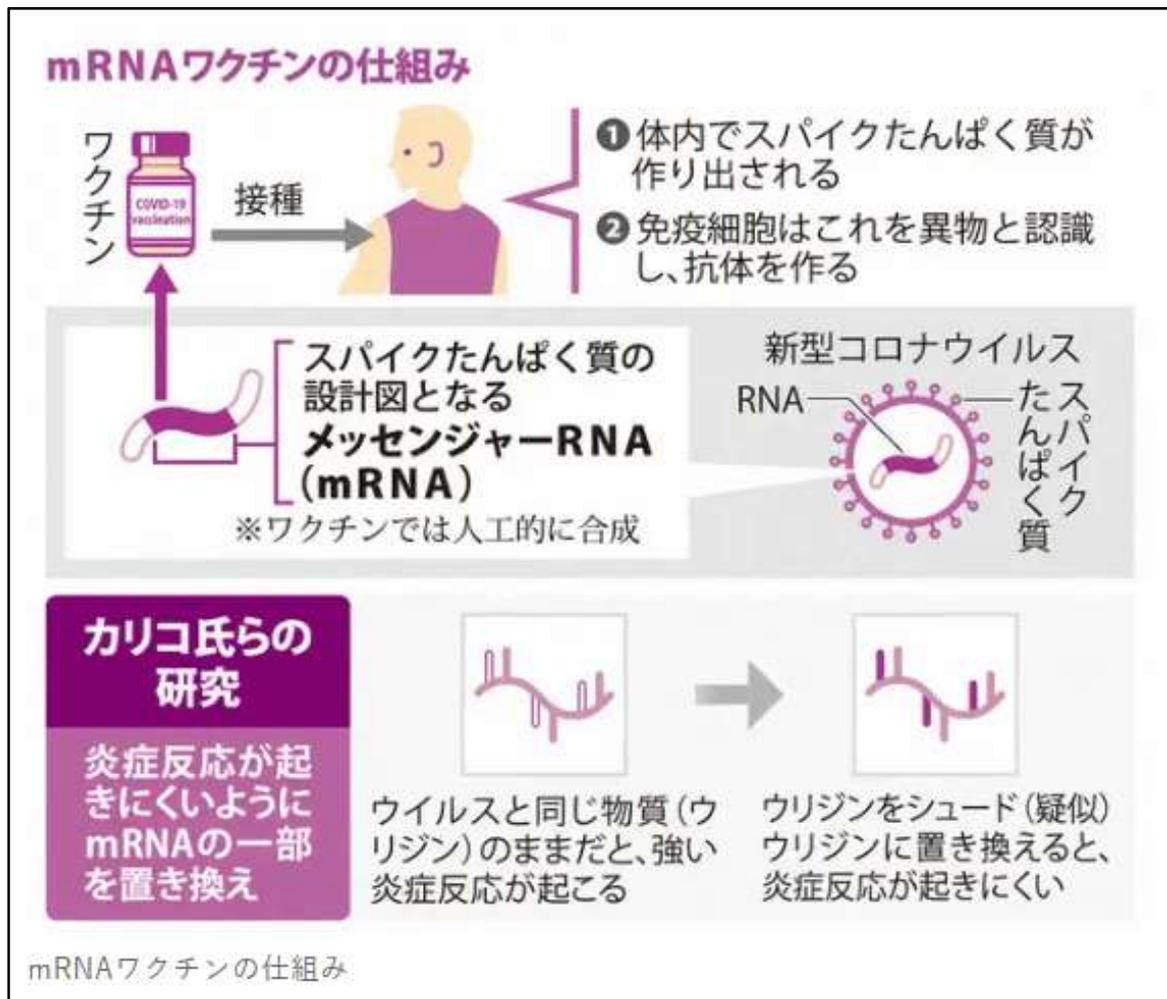
——情報を発信するにあたり、どのような点に注意されていますか？

◆あまり言い切らないことです。ワクチンについても推奨する立場ではあるものの、「皆さん、ぜひ打ってください」という書き方はせずに、メリットとデメリット、デメリットはこの場合副反応ですね、を、しっかり説明した上で、接種をご検討ください、と伝えてきました。

「何か意見を言っているよりも、事実をずっと書き続けたただけだよ」と誰かに指摘されましたが、それはその通りで、何かを強く主張したことはあまりありません。エビデンスに基づいた発信を心掛けたつもりではあります。

——実際、忽那さんの発信は高圧的でも攻撃的でもありません。異なる信念を持つ人に対して反論もされませんでした。X（ツイッター）での投稿に対し、心ないコメントが多数書き込まれました。

◆特に増え始めたのは、21年にワクチン接種が始まった頃からでしょうか。私はそもそもXで反論しませんからね。言い返しても議論は平行線をたどるだけで、絶対にいいことはないですから。



——それら誹謗中傷に対し、22年12月、裁判所に発信者（投稿者）情報の開示命令を申し立て、23年7月には和解に応じなかった17人に民事訴訟を提起しました。多忙な中、決断に至った理由は何でしょうか。

◆訴訟の決め手は、新型コロナが5類に移行して、自分の仕事量が減ってきたこと、あとは、医療者が情報発信し続ける中で、万が一、次のパンデミック（世界的大流行）が起きた際、今回のような被害を受ける方がいてはならないと考えたからです。

すべて弁護士に任せているのでそこまでの労力はかかりません。ただお金はかかりますね。訴訟のための費用は600万円くらいです。

——開示命令の対象になったのは50人ほどで、特定できた発信者40人には、生活保護受給者、無職で引きこもりの人など、社会的弱者の方が多かったそうですね。

◆対象者は、直近3カ月以内の投稿者のうち“厳選した”50人ですから。例えば「殺人鬼」「詐欺師」とまでは言っていないような攻撃的な書き込みは、数えられないくらいありました。

その人たちは、憂さ晴らしをしていたのかもしれませんが、陰謀論にはまり、ワクチンを打つと悪いウイルスがばらまかれると信じ込んで、暴力的な行動に至ってしまったのかもしれませんが。

私は、ワクチン接種に反対の考え方を持っている人がいらっしゃってもいいと思います。接種するしないは、個人の判断です。ただ、自分と意見が異なるからという理由で、誹謗中傷が許されるわけではありません。たとえ社会的に困難な状況にあったからといっても、それが理由にはなりません。

メディアが伝えたいこと、医療者が伝えたいこと

——20年4月にスタートしたツイッターのフォロワーは23万人超えです。なぜ、ご自身の発信がここまで注目されたのだと思いますか？

◆Xは基本的に、ヤフーの記事のリンクを張っているだけですからね。どうでしょう。毎週書いていたからかもしれませんね。週に1回必ずヤフーの記事を執筆することを目指していたので。ユーチューバーでもそうですけど、定期的に更新するのが大事なのではないのでしょうか。

——コロナ禍に医療情報をSNSで発信する医療者が一気に増えました。その理由をどうお考えですか。

◆医療者がSNSで直接発信できるようになったのは大きいですね。テレビに出演しても、質問が決まっているケースが多い。メディアにはメディアの視点があって、医療者には医療者の視点があります。

医療者が一番伝えたいのは、新しいエビデンスや、逼迫（ひっばく）する病院の状況です。ワクチン接種が今最も重要なトピックだと捉えていても、テレビでは、「オリンピックをこの状況で開催すべきか否か」を聞かれる。そういう意味では、自分が今、伝えたいメッセージを届けられるというメリットがありますね。

あと、新型コロナに関しては、新しい情報が次々と出てくるので、メディアを通してそれを逐次紹介するのが難しいからではないでしょうか。

——以前、この連載で市原真さんに、医療者が情報発信するモチベーションの一つに、HPV（ヒトパピローマウイルス）ワクチン報道をはじめとするメディアへの不信感があるの

ではないか、と聞いたところ、「メディアの『不信感』とおっしゃいますが、それは19年まで、今は『不全感』だ」と返ってきました。

◆なるほど。そのような考えもあるのですね。

新型コロナの報道で、20年4月くらいに第1波が終わった後、あるテレビの情報番組に謎の専門家が現れて、「日本国民はもう皆、免疫を持っているから第2波は起こらない」といった発言をしていました。

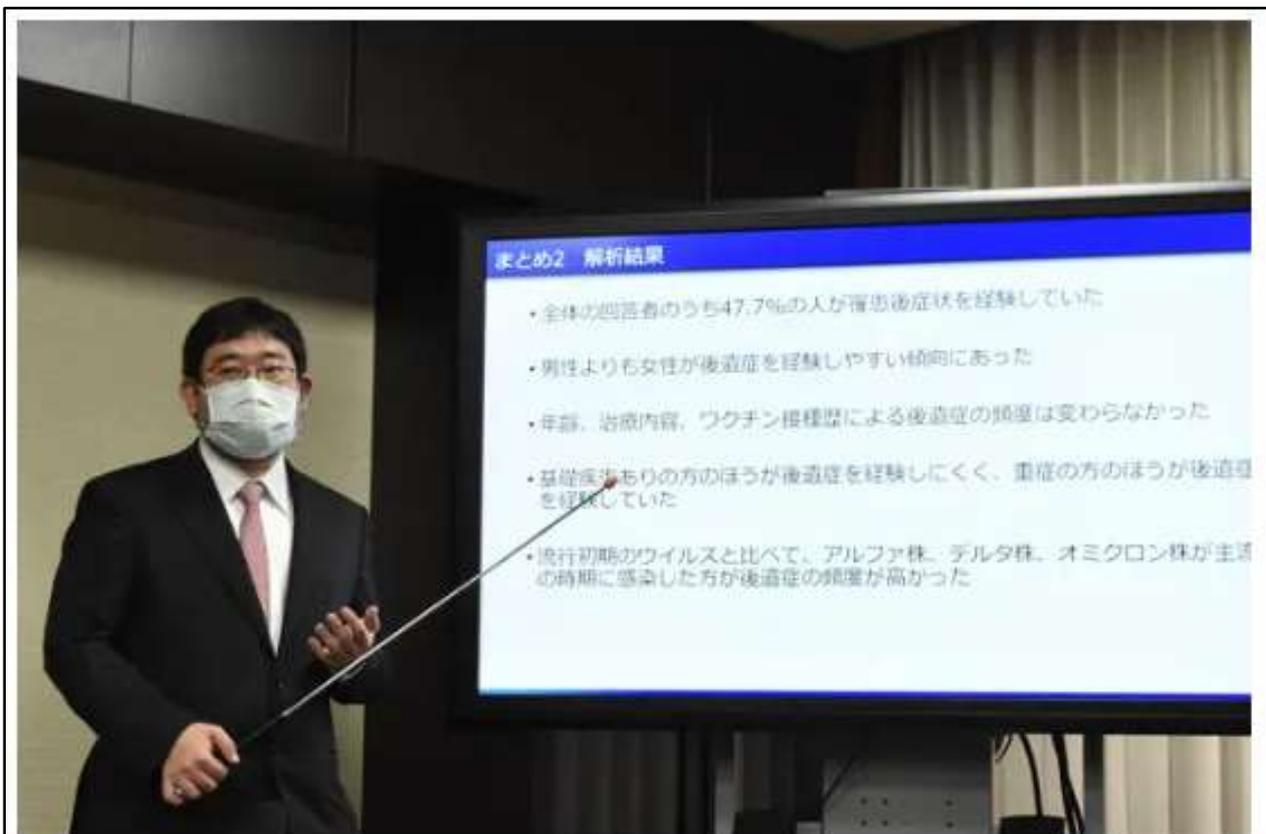
私は絶対にこの番組には出演しないと誓いましたが、メディアには、誰が専門家で科学的に正しい発言をしているのかを判断できないという問題があるかもしれませんね。

特定の誰かの発言だけを信じず広く情報収集を

——新型コロナに関しては、医学会の情報発信にも問題があったように思えます。東京都医師会の尾崎治夫会長は21年2月9日の記者会見で、新型コロナの治療薬として認められていないイベルメクチンとステロイド系の抗炎症薬「デキサメタゾン」の使用を国に検討してほしいと述べました。

また、日本感染症学会と日本化学療法学会は22年9月2日、「新型コロナウイルス感染症における喫緊の課題と解決策に関する提言」を厚生労働相に提出し、同年7月20日の薬事・食品衛生審議会薬事分科会・医薬品第2部会合同会議で緊急承認を見送られた塩野義製薬の治療薬ゾコーバの早期緊急承認を求めました（※その後、23年6月8日に承認）。

◆今回のようなパンデミックにおいて、学会が主体になって、医療を導くということも可能だったと思います。次のパンデミックでは、学会が日本をけん引することを期待したいです。



大阪府豊中市民対象の新型コロナウイルス感染症後遺症についての調査結果を説明する忽那賢志・大阪大教授 = 豊中市役所で2022年12月14日、菅沼舞撮影

ゾコーバに関しては、日本の製薬会社なので何とか承認されてほしいという気持ちの表れだったのだと思います。個人的には、国内の製薬会社を盛り上げること自体は大事だと思います。抗ウイルス薬やワクチンを開発できる状況を作っていないと、どんどん創薬力が衰えていきますから。

とはいえ、承認はエビデンスに基づいて行われるものです。しっかり新薬の効果と安全性が評価されるからこそ私たちは安心して使用できるようになるわけです。

——玉石混交の医療情報を、どのように取舍選択すればよいのでしょうか。

◆まず、特定の誰か一人の発言を信用しない方がいいですね。そもそもその発信者の情報源も、SNS 上の他の誰かの投稿だったりするかもしれません。例えば、ワクチン接種に反対する人をフォローすると、自分と同じワクチン反対派の情報がどんどん流れてくるようになります。

ですので、メディアでも一つの新聞やテレビだけでなく、複数の媒体を参考にする。専門家も同様で、「忽那のことしか信じません」ではなく、他の感染症や公衆衛生の専門家を追いかけて、さまざまな側面から情報を理解していくことが大切なのだと思います。信じている“特定の一人”が時折、間違った情報を伝える可能性もありますから。

——コロナ禍の医療情報発信を振り返って今、何を思いますか。

◆本来、リスクコミュニケーションの観点からも、コロナ禍における情報発信は、公的な専門機関が担ってもよかったのではないのでしょうか。

人を救いたい一心で、無償で情報発信を行う医療者が、本当にひどい誹謗中傷を受けました。私の家族に対する被害はありませんでしたが、実際、(単身赴任なので) 私自身は引越さざるを得ない状況になりました。

発信者の安全が守られず、大変な目に遭う。全部個人に降りかかってくる状況は厳しいですね。これは、医療者だけの問題ではありませんが、SNS の投稿には何らかの規制が必要だと考えます。

——そんなコロナ禍の情報発信で大変な時期に、心温まる“事件”もありました。

忽那さんが医大生時代に執筆していたブログの愛読者だったという漫画家の羽海野(うみの)チカさんから励ましのメッセージが X を通じて届き、今や誰もが一度は目にしたことがある感染対策の啓蒙(けいもう)ポスターも描き下ろしてくれました。

実は私も、サブカル医大生時代のユーモアとペーススあふれる忽那さんの個性的な文体を記憶しています。ミュージシャンの七尾旅人(たびと)さんとの交流もあり、「よかったなあ」としみじみしていました。

◆もともと私は羽海野先生のマンガが大好きだったんです。ビックリしましたね。まさか羽海野先生が読んでくださっていたとは知らず、あんなしょうもないこと書いていたんですよ。

七尾さんも以前から大ファンでした。自宅療養になっている人たちに食事を届ける活動をされていたので、それを応援したいとメッセージを送って、実際にお会いしました。七尾さんも羽海野先生同様、私のヤフー記事を読んでくださっていたようです。

あとはTBS ラジオで、(脚本家の)宮藤官九郎さんの番組にも出演してお話しできました。サブカル好きが新型コロナによって報われましたね。ちょっと頑張ったご褒美的な感じですよ。

くつな・さとし 1978 年生まれ。山口大医学部卒。国立国際医療研究センターを経て、2021 年 7 月から大阪大学大学院医学系研究科教授。専門は感染制御学。専門は新興感染症、輸入感染症。趣味はダニ収集と、寺巡り。X (@kutsunasatoshi) でも発信している。